

## その他

## 山田原欽「瀟湘八景詩」訳注

鎌田 出\*1

山田原欽『復軒詩藁』（山口県立山口図書館所蔵）には、合計3首の八景詩が所収されている。

ここで言う八景詩とは、北宋の文人画家であった宋迪に始まるとされる八つの画題、「平沙雁落」「遠浦帆帰」「山市晴嵐」「江天暮雪」「洞庭秋月」「瀟湘夜雨」「煙寺晚鐘」「漁村落照」<sup>(注1)</sup>を詩題とする「瀟湘八景詩」と、「瀟湘八景」に倣って選定された八景を詠む詩である。

「瀟湘八景」に倣って選定された八景は、1) 瀟湘変形型（瀟湘八景の画題に示された八つの場面、または景物を一部別の物に置き換える等、変形を加えたもの）、2) 名所型（瀟湘八景とは無関係に、それぞれの土地の名所と景物を取り上げたもの）、の二つに分けることが出来る<sup>(注2)</sup>。

この区別を踏まえて八景詩を大別すれば、「瀟湘八景」をそのまま継承して詠む「瀟湘八景詩」、「瀟湘八景」に倣って選定された八景を詠む「瀟湘変形型八景詩」及び「名所型八景詩」、の三つに分類される。なお、「六景」のように景物を減じたもの、「十景」「十二景」のように景物を加増したものも通常は“八景”として取り扱われているが、ここでは八つの場面と景物を備えたもののみを純粋な八景と定義し、この八景を詠み込む詩を「八景詩」と表記する。

この分類に従うと、山田原欽の3首の「八景詩」は、「瀟湘八景詩」1首、「瀟湘変形型八景詩」2首となる。参考までに、『復軒詩藁』には2首の十景詩（「高良山十景詩」「大寧十境詩」）が所収されている。

今回訳注を加えるのは、延宝7（1679）年、山田原欽14歳の時に作られた「瀟湘八景詩」である。

凡例

- 一、底本には、山口県立山口図書館蔵『復軒詩藁』を用いた<sup>(注3)</sup>。
- 二、訳注は、1首毎に詩題を示した上で、①原文、②訓読、③注釈、④訳文の順で記述し、詩題のみはゴシック体の太字とした。
- 三、本文、訓読及び語釈部分は、原則として引用文も含めて新漢字を使用した。但し、「峯・峰」「烟・煙」など、原文の趣を残すために例外的に対処した箇所がある。
- 四、かなづかいには、訓読部分もふくめて、すべて現代かなづかいとした。

## 「瀟湘夜雨 其一」

①原文

(題注)

画工狩野某図八景請賛

(詩)

湘江秋雨夜蒼涼  
 葭浦漂揺万里航  
 篷底寂寥無一事  
 只聞湍響接風篁

②訓読

(題注)

画工狩野某 八景を<sup>えが</sup>き賛を請う

湘江の秋雨 夜蒼涼

葭<sup>だんぼ</sup>浦漂揺たり 万里の航篷<sup>ほうてい</sup>底寂寥として一事無く

\*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

只だ聞く 湍響の風篁に接するを

③語釈

「瀟湘夜雨」…瀟湘八景詩の景物の順序には幾つかの系統が存在する。そのうち「瀟湘夜雨」から始まるものは、南宋から元にかけて流行した「玉澗系統」に属する<sup>(注4)</sup>。

「狩野某」…未詳。安藤紀一氏は、戦国時代の画家であった狩野元信の子の宗信（祐雪）である可能性を述べる<sup>(注5)</sup>。

「湘江」…湖南省東部を北東に流れ、洞庭湖に注ぐ大河。湘水とも言う。ここでは「瀟湘」の意で用いられている。

「蒼涼」…物寂しい様子を言う。同じ韻母と声調を共有する疊韻の語。

「葭浦」…「葭（ダン）」は、樹木の木槿<sup>むくげ</sup>を言うが、ここでは「葭（カ）」の誤記。アシの生える水辺。

「漂揺」…波に揺れ動く様子を言う。疊韻の語。

「万里」…ここでは具体的な距離ではなく、果てしなく遠い様を言う。

「篷底」…船の中、船室の意。『翰林五鳳集』<sup>(注6)</sup>（卷五十二「八景」）に引く惟肖得巖の瀟湘夜雨詩に「今夜孤舟篷底客、明朝白髮幾千茎（今夜 孤舟篷底の客、明朝 白髮幾千の茎）」とある。

「無一事」…何事もない。何もすることがない。

「湍響」…流れる水の音。

「風篁」…風になびく竹林。湘水のほとりに、表皮に斑点を持つ「斑竹<sup>はんちく</sup>」が多く生えていた。この「斑竹」に関しては、舜帝が死んだ時、二人の妃が流した涙の痕であるという「湘君伝説」が語り継がれていた。『国花集』（坤）<sup>(注7)</sup>に載せる玉澗「八景賛②」<sup>(注8)</sup>の「瀟湘夜雨」に「孤灯篷裏聴 簫瑟、祇向竹枝添涙痕（孤灯 篷裏に簫瑟を聴き、祇だ竹枝に向かひて涙痕を添ふ）」とある。

④通釈

画工の狩野某が八景画を描き賛を乞うてきた

秋雨の降る瀟湘の夜はもの寂しく

水辺のアシは波に揺れ、その傍らを果てしない船旅は続く

船の中はひっそりと静まり何をするでもなく

ただ風に揺られる竹林に響く波音だけが聞こえる

「洞庭秋月 其二」

①原文

青艸山頭烟雨霽

眼前吳楚横相連

樓明水面三更月

波動湖心万里天

②訓読

青艸の山頭に烟雨は霽れ

眼前の吳楚 相い連なりて横たわる

樓は明かなり 水面三更の月

波は湖心を動かす 万里の天

③語釈

「青艸」…草木が生い茂り青く見える様子を言う。

「烟雨」…けむるような雨。こぬか雨。

「吳楚」…杜甫「登岳陽樓（岳陽樓に登る）」詩（『全唐詩』卷二百三十三）を踏まえる。その前半部に、

昔聞洞庭水（昔聞く 洞庭の水）

今上岳陽樓（今上る 岳陽樓）

吳楚東南坼（吳楚 東南に坼<sup>さ</sup>け）

乾坤日夜浮（乾坤 日夜に浮かぶ）

と詠まれている。岳陽樓は洞庭湖東岸に位置する高樓。そこから眺めると、吳楚の大地が引き裂かれ、大地の亀裂である洞庭湖に天地が浮かんでいるようだとする広大なスケールの描写である。『翰林五鳳集』（卷五十二「八景」）に引く村庵文柄

の洞庭秋月詩に「洞庭壯觀短屏中、楚折成南吳折東（洞庭壯觀たり 短屏の中、楚は折れて南と成り吳は折れて東）」とある。

「楼明」…「楼」は、高楼。「岳陽楼」と考えて良い。高楼（岳陽楼）が、月明りに美しく照らし出されている様子を言う。

「三更」…五更（日没から日の出までの夜を五つに分ける）の三番目。およそ現在の午前零時から午前1時まで。

「湖心」…湖（洞庭湖）の中心。瀟湘八景が誕生する以前の唐代・劉禹錫「洞庭秋月行」詩（『全唐詩』卷三百五十六）に、「洞庭秋月生湖心、曾波万頃如鎔金（洞庭の秋月 湖心に生じ、曾波万頃 鎔金の如し）」とある。洞庭湖の湖面に映る秋月を愛でる詩的発想が、唐代には定着していた証左と言える。

#### ④通釈

青々とした山の頂にけむっていた雨があがり  
目の前には呉楚の地が連なり横たわっている  
高楼（岳陽楼）は月に照らされて明るく、洞庭湖の水面に三更の月が映り  
果てしなく広がる空の下、湖の中心で波に揺れている

### 「烟寺晚鐘 其三」

#### ①原文

湘峯日落気凄凄  
風送疎鐘度竹溪  
佇立断橋時極目  
松烟遮却一招提

#### ②訓読

湘峯日落ちて気凄凄たり  
風は疎鐘を送り竹溪を渡る

断橋に佇立して時に目を極むれば  
松烟は遮却す 一招提

#### ③語釈

「湘峯」…湘水を取り巻く山々。南宋・李流謙「巖桂堂」詩（『澹齋集』卷四）に「湘峯峩峩湘水碧、万古魚龍護冰魄（湘峯は峩峩たり 湘水は碧たり、万古の魚龍 冰魄を護る）」とある。

「凄凄」…寒々とした様子を言う。

「疎鐘」…時折聞こえる鐘の音。「疎」は「疎」の異体字。原欽の菽八景詩「小松江晚鐘」に「断霞夕竹峯、深寺度疎鐘（断霞 夕竹の峯、深寺 疎鐘度る）」とある。

「佇立」…一箇所に立ち止まる。

「断橋」…壊れ落ちた橋を言うが、ここでは杭州西湖の白堤にかかる「断橋」をイメージした表現。「断橋残雪」は、西湖十景の一つ。白堤の先には孤山と呼ばれる西湖最大の島があり、陳代に建立された永福寺（孤山寺、孤寺とも呼ばれた）があった。

「時」…ここでは、ちょうどその時、の意を表す副詞。

「極目」…目の届く先まで眺める。

「松烟」…『大漢和辞典』は白居易「長安閑居」を引いて「松をたく煙。又、たいまつ煙」とする。同詩（『全唐詩』卷四百三十六）には「風竹松煙 昼掩関、意中長似在深山（風竹松煙 昼関を掩い、意中長く深山に在るに似る）」とあるが、「松をたく煙」では「風竹（風に揺れる竹）」、さらには「似在深山（人里離れた山の奥にいるようだ）」と詩意が揃わない。ここは「松林を覆うもや」と解する。

『翰林五鳳集』（卷五十二「八景」）に引く仁如集堯の烟寺晚鐘詩の「孤塔烟遮隔寺楼、出林殷殷暮鐘幽（孤塔は烟に遮られ寺楼を隔て、林を出れば殷殷として暮鐘幽かなり）」と詩意を同じくするものであろう。

「遮却」…遮ってしまっていることを言う。「却」は、

上に来る動詞の表す動作が継続していることを表す助詞。

「招提」…寺。寺院。

④通釈

湘水を取り巻く山々では日が沈み、寒々とした気配  
風に乗って、鐘の音が竹林の谷に時折響き渡る  
橋の上に立ち止まって遠くを眺めやると  
松林に漂うもやが寺を覆い隠してしまっている

「遠浦帰帆 其四」

①原文

蒼波江上荻花秋  
岸岸人家対碧流  
日暮遠帆逐風去  
青山白水自悠悠

②訓読

蒼波江上 <sup>てきか</sup> 荻花の秋  
岸岸の人家 碧流に対す  
日暮の遠帆 風を逐いて去り  
青山白水 <sup>おのずか</sup> 自ら悠悠

③語釈

「荻花」…「荻」はイネ科の多年草で、河川敷など湿地に群生し、秋に花をつける。『国花集』（坤）が載せる玉澗「八景賛②」の「漁村夕照」に「呼童買酒大家酔、臥看西風舞荻花（童を呼び酒を買ひて大家酔い、臥して看る 西風に荻花の舞うを）」とある。

「岸岸」…あちこちの岸。杜甫「春日江村五首 其一」詩（『全唐詩』卷二百二十八）に「農務村村急、春流岸岸深（農務 村村急に、春流 岸岸深し）」とある。

「碧」…碧玉（エメラルド）のように澄んだ濃い緑色。

「青山」…樹木が生い茂り青く見える山。『国花集』（坤）が載せる玉澗「八景賛②」の「遠浦帰帆」に「鷺界青山一株秋、潮平銀浪接天流（鷺界青山一株の秋、潮は平らかにして銀浪は天に接して流る）」とある。

「白水」…澄んだ川の流れ。「白」は穢れの無いことを言う。杜甫「新安吏」詩（『全唐詩』卷二百十七）に「白水暮東流、青山猶哭声（白水 暮に東流し、青山 猶お哭声あり）」とある。

「遠帆」…遠くに浮かぶ（帆掛け）船。唐・許渾「瓜州留別李詡」詩に「孤館宿時風帯雨、遠帆帰処水連雲（孤館に宿るの時 風は雨を帯び、遠帆の帰る処 水は雲に連なる）」とある。

「自」…ここでは「おのずから」と訓じて「それはそれとして・自然に」の意を表す。

「悠悠」…ここではゆったりしている様子を言う。

④通釈

青々とした波が寄せる湘水のほとりは、荻の花が咲く秋  
岸辺の家々は、澄んだ緑色の流れに面している  
日暮れ時、遠くに浮かぶ船は風を追い帰って行くが  
青々とした山々、澄んだ川の流れはそれぞれゆったりとしている

「漁村夕照 其五」

①原文

一曲水村擁槿籬  
長風遠靄晚来奇  
夕暉斜射半江浪  
正是良人投網時

②訓読

一曲の水村 槿籬を擁し  
長風遠靄 晚来奇なり

夕暉は斜めに射して江浪に半ばかり  
正に是れ良人網を投むるの時

### ③語釈

「一曲」…川の曲がり流れる様を言う。杜甫「江村」詩（『全唐詩』巻二百二十六）に「清江一曲抱村流、長夏江村事事幽（清江一曲 村を抱きて流れ、長夏江村 事事幽たり）」とある。

「水村」…水辺の村。「江村」と同義。杜牧「江南春絶句」詩（『全唐詩』巻五百二十二）に「千里鶯啼緑映紅、水村山郭酒旗風（千里鶯啼いて 緑紅に映ず、水村山郭 酒旗の風）」とある。

「槿籬」…木槿の生垣。

「長風」…遠く吹き渡る風。李白「行路難三首 其一」詩（『全唐詩』巻百六十二）に「長風破浪会有時、直挂雲帆濟蒼海（長風浪を破る 会<sup>かなら</sup>ず時有り、直ちに雲帆を掛けて蒼海<sup>わた</sup>を濟らん）」とある。

「遠靄」…「靄」は、水蒸気が立ち込めている現象のこと。もや。遠くまでたなびくもや。

「晩来」…ここでは陽の沈む時刻、夕方を言う。

「奇」…めったに見られない優れた景色であること。北宋・王安石の「遊褒禅山記」（『臨川文集』巻八十三）に「其進愈難而其見愈奇（其の進むこと 愈<sup>いよいよ</sup> 難くして其の見ること 愈<sup>いよいよ</sup> 奇なり）」とある。

「夕暉」…夕陽の光。

「半江浪」…沈みかけた夕陽の斜めに射し込む光が、川面に半分（半円形）の形で映っている様を言う。『翰林五鳳集』（巻五十二「八景」）に引く蘭坡景菑の「漁村夕照」に「短籬疎処懸漁網、留得斜陽紅半規（短籬の疎処 漁網を懸け、留め得たり 斜陽の紅半規たるを）」とあるのと同じ。

「良人」…ここでは漁師である夫を言う。李白「子夜呉歌 秋歌」詩（『全唐詩』巻百六十五）に「何日平胡虜、良人罷遠征（何れの日か胡虜を平げ、良人 遠征を罷めん）」とある。

「正是」…「それはちょうど～である」の意を表す。

「投網」…『大漢和辞典』は「あみを投げ込む」と説明する。より細かく解釈すれば「魚を獲るために網を投げ込む」意となるが、「夕照」は魚を終えて帰る時刻であり、漁に出るのでは「漁村夕照」の画題・詩題にそぐわない。

『翰林五鳳集』（巻五十二「八景」）の「漁村夕照」を通覧すると、「漁翁収網已歸去（漁翁 網を収め已に帰り去る）」（瑞溪）、「両髯相喚急収網（両髯相い喚びて急ぎ網を収む）」（心田）、「村村晒網晚風凄（村村 網を晒すに晚風凄たり）」（仁如）等、「漁村夕照」を示唆する代表的モチーフである「網」は、「収める（＝片づける）・干す（＝次の漁への準備）」ものとして詠まれるのが通例である。「瀟湘八景画」においても、「網を干す」というモチーフは「漁村夕照」において頻用されるモチーフである。原欽の萩八景詩「鶴江夕照」でも「斜陽宜曬網（斜陽 網を曬すに宜しく）」と詠まれている。

以上により、ここでは「投」を「やめる」と解して「やむ」と訓じる。用例としては杜牧「送蘇協律從事振武」詩（『全唐詩』巻五百二十六）に「王粲暫投筆、呂虔初佩刀（王粲 暫く筆を投じ、呂虔 初めて刀を佩ぶ）」とある。漁をやめる。

### ④通釈

川が曲がるあたりの村は、木槿の生垣に囲まれ風に運ばれたもやが遠くまでたなびいて、夕暮時はとりわけえも言われぬ素晴らしき夕陽が斜めに射して、水面に半円を映しているそれはちょうど漁師である夫が魚を終える時だ

### 「平沙落雁 其六」

#### ①原文

平沙渺渺晚江秋  
万頃風烟一望幽

孤渚幾行関北雁  
下来収羽傍常流

②訓読

平沙<sup>びょうびょう</sup> 渺 渺 たり 晩江の秋  
万頃の風烟 一望幽たり  
孤渚<sup>いく</sup> 幾行ぞ 関北の雁  
下り来りて羽を常流の傍らに収む

③語釈

「平沙渺渺」…「平沙」は広い砂浜。「渺渺」は果てしなく広がる様を言う。原欽「江上晩望」詩（延宝五年）に、「独立寒風時極目、平沙渺渺荻花秋（独り寒風に立ちて時に目を極むれば、平沙渺渺たり荻花の秋）」と同じ表現が見える。

「万頃」…「頃」は広さを表す量詞で百畝（182 畝）を表すが、ここでは広さを強調する表現として用いられている。

「風烟」…風ともや。風に運ばれたもやが一面にかかっている様子を言う。

「幽」…一面のもやによって、暗く霞んでいる様子を言う。

「孤渚」…岸から離れた川中にぼつんと浮かぶ中洲のこと。明・王洪「舟中雜興 三十首 其六」詩（『毅齋集』卷三）に「宿雁鳴孤渚、驚鳧下遠汀（宿雁は孤渚に鳴き、驚鳧は遠汀に下る）」とある。

「幾行」…「幾」は不定の数を問う疑問詞、「行」は列を成すものを数える数詞。列を成して飛ぶ雁について、どれくらいの数があるのかを自問自答する。『翰林五鳳集』（卷五十二「八景」）に引く天隱龍沢の「平沙落雁図」に「渺渺平沙蘆葦風、幾行旅雁渡秋空（渺渺たる平沙 蘆葦の風、幾行の旅雁ぞ 秋空を渡る）」とあり、第1句「平沙渺渺晩江秋」も含めて、この詩からの影響の可能性が推測される。（雁たちの）数はどれくらいであろうか。

「関北」…関所の北方。雁の出発地である漠北の地を言う。「関」が具体的にどの「関所」を指すかは不詳。雁にまつわる関所としては、山西省北部の句注山（雁門山とも呼ばれる）に置かれた「雁門関」が名高い<sup>(注9)</sup>。

「常流」…長い川。『史記』（卷八十四）に引かれる屈原「漁夫辞」に「寧赴常流而葬乎江魚腹中耳（寧ろ常流に赴き江魚の腹中に葬られんのみ）」とあり、司馬貞の索隱に「常流猶長流也（常流猶お長流のごとし）」とある。楚の屈原が汨羅江（湘水の支流の一つ）に投身自殺した悲話は、「瀟湘夜雨」で述べた湘君伝説と共に、瀟湘八景以前の瀟湘を詩跡化に大きな役割を果たした。原欽が「常流」の語を用いたのは、この伝統的発想を踏まえたものであろう<sup>(注10)</sup>。

④通釈

砂浜は果てしなく広がり、夕暮の瀟湘は秋の気配  
風に運ばれたもやがたなびいて、見渡すかぎり暗く  
かすんでいる

中洲にはどれくらいの数であろうか、漠北より訪れた  
雁たちが

かの屈原が身を投じた流れの傍らに羽を休めている

「江天暮雪 其七」

①原文

同雲漠漠暮天黒  
片片随風変態頻  
銀界茫然鼎馬上  
無人知道渡江津

②訓読

同雲漠漠たり 暮に天は黒く  
片片として風に随い 態を変ずること頻りなり

銀界茫然として馬に上りて帰る  
人の江を渡る津を<sup>しん</sup>知<sup>し</sup>道<sup>る</sup>無し

③語釈

「同雲」…雲がすべて同じ色をしていることで、今にも雪が降ろうとしている兆しを言う。『詩経集伝』（巻五「小雅 谷風之什 信南山」）に「上天同雲、雨雪雰雰（上天<sup>ひと</sup> 同しく雲ありて、雪を雨ふらすこと雰雰たり）」とあり、朱熹の注に「同雲雲一色也。将雪意之候如此（同雲雲の一色なるなり。将に雪ふらんとするの候此くの如し）」とある。

「漠漠」…遠く連なる様。ここでは雲が空一面に垂れこめている様子を言う。

「片片」…切れ切れになっている様、また、軽く飛ぶ様。ここでは空に散らばり浮かぶ雲を言う。唐・李頎「龍門西峰曉望劉十八不至」詩（『全唐詩』卷百三十二）に「片片雲触峯、離離鳥渡水（片片たる雲は峯に触れ、離離たる鳥は水を渡る）」とある。

「態」…ここでは雲の姿・形を言う。

「銀界」…一面の雪景色。「銀」は、銀のような色、つやのある白色を言う。北宋・蘇轍「舟中風雪五絶 其一」詩（『欒城集』卷十三）に「棹独依銀世界、山川路絶欲安帰（棹は独り銀世界に依り、山川に路絶えて<sup>いづ</sup>安くに帰らんと欲す）」とある。

「茫然」…ぼやけている様。雪景色がはるか遠くまで広がっていることを言う。

「津」…渡し場。原欽の萩八景詩「桜江暮雪」に「雪満桜江更問津、晚来舟子訝行人（雪は桜江に満ちて更に津を問う、晚来 舟子行人を訝る）」とある。『翰林五鳳集』（巻五十二「八景」）には「江天暮雪」を詠む詩を24首載せるが、「渡し場（＝津）の舟」を描くものはなく、描かれるのは「漁翁」が操る「漁舟」のみである。

絵画に目を向けた場合、狩野探幽筆「瀟湘八景

図」（根津美術館所蔵）<sup>（注11）</sup>の「江天暮雪」に渡し船らしきものを確認できる。原欽の萩八景詩「桜江暮雪」と同様、詩歌における伝統的モチーフに対して狩野某の八景図に描かれた（または、实景の）モチーフを優先させたものと考えられる。「知道」…「知る」の口語表現。「道」は動詞の下に添える接尾辞。王安石「題北山隱居王閑叟壁」詩（『臨川文集』卷三十一）に「举世但知旌隱逸、誰人知道是王孫（世を挙げて但だ知る 隱逸を<sup>あら</sup>旌わすを、誰が人ぞ知道る 是れ王孫なるを）」とある。

④通釈

雪雲が一面に垂れこめ、夕暮の空は黒々としている  
きれぎれの雲は、それぞれが風に吹かれて様々に姿  
を変えてゆく  
何処までも続く銀世界の中を、馬に乗って帰る  
渡し場が何処にあるかを知る人はいない

「山市晴嵐 其八」

①原文

陰叡透迤險棧斜  
山城晴色映飛霞  
市橋街上嵐光裡  
醉客不知帰宅賒

②訓読

陰は<sup>みか</sup>叡く<sup>い</sup>透迤として 險棧斜めなり  
山城 晴色 飛霞に映ず  
市橋 街上 嵐光の裡  
醉客は知らず 帰路<sup>とお</sup>の賒きを

③語釈

「山市」…山間の人々の集まる場所、山間の町。「山市晴嵐」は、玉潤「八景賛①」のように晚景を詠

むものも多いが、呉永三氏によれば「北宋時代から度々宿雨が止み、朝陽が差し込むイメージとして詠われる」という<sup>(注12)</sup>。

「晴嵐」…晴れた日に、陽光で蒸発した山気が立ちのぼること。

「陰叡」…未詳。続く「透迤」より、山市に至る道程の描写とする。「陰」は「山（の北川）」を言う。「叡」は、ここでは「濬」に通じ「深い」意と解釈する。山深く。

「透迤」…うねうねと曲がりくねる。山市に至る道の曲がりくねる様を言う。

「陰棧」…「棧」は、崖に取り付けた板のかけはし。傾斜の急なかけはし。

「山城」…山間の町。唐・韋応物「対春雪」詩（『全唐詩』巻百九十三）に「州貧人吏稀、雪満山城曙（州は貧くして人吏稀に、雪は山城の曙に満つ）」とある。

「晴色」…晴れた日の景色を言う。

「飛霞」…「霞」は、朝陽または夕陽に赤く染まった雲のこと。ここでは空を行く雲が朝焼けに染まった様子を言う。

「市橋」…『国花集』（坤）が載せる玉潤「八景賛①」の「山市晴嵐」に「尤好市橋官柳外、酒旗摇曳客思家（尤も好む 市橋官柳の外、酒旗は摇曳す 客思の家）」とあるのを踏まえるが、これは杜甫「西郊」詩（『全唐詩』巻二百二十六）の「市橋官柳細、江路野梅香（市橋に官柳細く、江路に野梅<sup>かんば</sup>香し）を踏まえるものである。「市橋」は成都西南の石牛門外にあった橋の名。ここではそうした具体性は無視され、山市に至る橋として一般化されている。

なお、「橋」は「山市晴嵐」の詩画両方における頻出モチーフである。

「嵐光」…山にかかるもやが日光に照り映える様子を言う。

「酔客」…山市晴嵐では、山市における賑わいを表すモチーフとして「酒家」が描かれることが多い。

絵画においては、「酒家」を表す「酒旗」（酒屋ののぼり）がしばしば描かれる。杜牧「江南春」詩（『全唐詩』巻五百二十二）に「千里鶯啼緑映紅、水村山郭酒旗風（千里鶯啼いて 緑 紅に映ず、水村 山郭 酒旗の風）」とある。

「賒」…遠く離れていることを言う。明・高啓「大癡小画」詩（『大全集』巻十六）に「溪水雖多曲、舟行不憚賒（溪水 曲多しと雖も、舟行 賒<sup>と</sup>きを憚らず）」とある。

#### ④通釈

山深く道はうねうねと曲がりくねり、かけはしはひどく険しい

山間の町は晴れて、朝焼けに赤く染まる雲が空を流れている

橋も町も朝日に照らされたもやの中にあるのだから酔った旅人には帰り道の遠さが分からないだろう

#### [注]

- (1) 北宋・沈括『夢溪筆談』（巻17）
- (2) 分類に際しては、青木陽二・榊原映子編「八景の分布と最近の研究動向—過去の景観評価データ—」（国立環境研究所報告第197号 2007）を参考にした。
- (3) 『復軒詩藁』については、渡辺憲司「山田原欽の前半生—近世初期文壇との交遊—」（『近世大名文芸圏研究』（八木書店1997）所収）に詳しい。
- (4) 呉永三「九州国立博物館所蔵朝鮮前期〈瀟湘八景図〉屏風に見る順序の問題」（『朝鮮学報』第228輯 2013）の「一、八景の順序」参照。
- (5) 安藤紀一『山田原欽』（明倫同窓会 1940）40頁。
- (6) 『大日本仏教全書 146』（仏書刊行会編 1922）所収。
- (7) 早稲田大学図書館所蔵『増補国花集』（巻之上、下）による。
- (8) 玉潤の賛詩には、玉潤自身の作として室町時代後



期から広まっていった八景詩と、伝玉潤作と言われる由来のはっきりしない八景詩がある。ここでは堀川貴司『瀟湘八景—詩歌と絵画に見る日本化の様相—』（臨川書店 2002）に従い、前者を「八景賛①」、後者を「八景賛②」と表記する。

- (9) 『漢詩の事典』（松浦友久編 大修館書店 1999）  
365～367 頁参照。

- (10) 植木久行編『中国詩跡事典』（研文出版 2015）  
443～445 頁参照。

- (11) 『瀟湘八景画集』（根津美術館 1962）参照。

- (12) 前掲注（4）「四、新しい八景文化」参照。